

売薬の意匠あれこれ 珙瑯(ほうろう)看板—その4

一般社団法人 北多摩薬剤師会会長 平井 有 (ひらい・たもつ)

ここでは、近代とくに昭和時代を中心にした「くすり」の看板広告の歴史には欠かすことのできない珙瑯(看板)を紹介してきま

したが、今回も引き続き、有名売薬を中心とした、その中でも丸い形の珙瑯(看板)を取り上げます。



①



②



③



④

①「アリナミン」

武田薬品工業は、今より240年以上もの昔の天明元年(1781)、初代の武田長兵衛翁が薬種問屋の「近江屋長兵衛」を開業したのが始まりですが、それから170年余りの時を経た戦後の高度経済成長が始まった年に「アリナミンF」が発売されました。この製品には武田薬品工業が発見したビタミンB1のプロドラッグであるアリチアミン含有しています。

2021年にはこのビタミン剤・ドリンク剤のブランド名である「アリナミン」を冠した「アリナミン製薬」が誕生しました。

この珙瑯看板は「武田薬品工業」時代の「アリナミン」の珙瑯(看板)です。

②「仁丹」

明治2年(1869)に広島にある神社の宮司の子として生まれた森下仁丹(株)の創始者である森下博翁は軍隊に召され任地の台湾で感染症になった際、原住民が清涼剤を口に含むことで感染症を予防していることを知り、後の「仁丹」の発想を得たようです。

この製品が発売されたのは明治38年(1905年)。儒教の「仁義礼智信」から「仁丹」と名付けられました。発売2年後には、商標の大礼服姿(軍人ではなく外交官)が日露戦争の勝利と相まって売り上げを拡大、一躍日本家庭薬のトップとなりました。

処方の組み合わせは改良の余地のないほど完璧で、現在の「仁丹」もほぼ同じ成分からなっています。

この看板に書かれた文字から推測しますと、日本が外地(台湾・朝鮮・中国など)に進出していた時代に貼られていた珙瑯看板と思われます。

③「救心」

富山の置き薬屋(配置売薬業者)であった「救心」創業者の堀正由翁はすでに効き目に高い評価のある中国伝統の「六神丸」をルーツに持つ「ひとつぶ(一粒)くすり」を携えて富山から上京、浅草に堀博愛薬房を設立し、「ホリ六神丸」として販売を始めました。

もともと「六神丸」はあたかも万病に効く薬、万能薬として使われており、また多くの配置売薬をはじめとする同業者による「〇〇六神丸」が存在していました。そこで堀正由翁は他製品との差別化を図る目的で、配置売薬の経験から「六神丸」の万能的な効き目のなかでも特に心臓に良く効くという点に着目し、心臓病に的を絞って処方や丸剤の大きさなどの改良を行い、また効果や適応を明確にあらわす「救心」という商品名を考案し商号も「救心製薬」に改めました。イメージチェンジは不成功し、それが現在まで続いています。

④「オロナイン軟膏」

この「オロナイン軟膏」と「オロナミンC」が大塚グループを支える二大看板商品でした。「オロナ」の名前はアメリカのロックフェラーによって設立された石油会社スタンダード・オイルの一部門の製薬会社「オロナイトケミカル」社が製造したオロナイトに由来しています。

「オロナミンC」のCMには現在も現役で活躍している大村崑氏やプロ野球選手(読売ジャイアンツ)などが採用され、「オロナイン軟膏」では関西出身の浪花千栄子氏を起用しましたが、それは本名の読みの「南口 キクノ(なんこう きくの)」にちなんでいます。また、大村崑氏が主演の「鞍馬天狗」の役名は「尾呂内 南公(おろない なんこう)」でした。